KAN 環

青蚊帳
第 50 号

千曲川地域の人と文化を紡ぐ

NPO法人上田図書館倶楽部（上田情報ライブラリー委託事業）

2023 年 7 月

青蚊帳

垂乳根（たらちね）の母が釣りたる青蚊帳を
すがしといねつたるみたるとも

長塚節（ながつかたかし）

表紙の写真
上田市古安曽のバラ園
10 数年前、カーラジオからバラの情報を伝えるリポーターの明るい声が流れた。早速訪れたところ、花々に魅了されると同時に、心のこもったもてなしを受けた。以来、毎年通い続けている。持ち主は先代からの庭を趣味のバラ園に変え、愛好家の友人たちが珍しい品種などを持ち寄って、バラの数は次第に増えていった。今ではオープンガーデンとして人々を迎え、鮮やかな季節を迎えた楽園に笑顔と楽しい会話があふれている。　　写真・文　矢幡正夫

もくじ

4 躍働
ナレーター・アナウンサー　駒村則子さん……伊藤文子
8 信濃を旅した文人たち
林聖子をめぐる人々（その一）……海野郁
11 ぶらり散策
矢出沢川遊歩道……望月聡子
14 気ままなひとり旅……中村恵子
17 ウクライナの子どもたちの日記……はな
20 暮らしを語るレイラインスポット……伊藤文子
24 あとがき

躍働

ナレーター・アナウンサー
駒村則子さん

「おいしい青菜を売る新しい青物屋が相生駅の駅前にあります」「お綾や母親におあやまりなさい」。発音しにくい文をできるだけ早く言う練習を繰り返す。ここは、令和5年度の生涯学習上田自由塾の「音読で喉トレ&脳トレ」講座初日の上野が丘公民館第二学習室。講師の駒村則子さんを囲むように座った18人の受講生が、真剣な面持ちで発声練習に取り組む。この日は口の筋トレや母音の練習、＊「外郎売（ういろうり）」の読み練習なども行われた。

駒村さん（58歳）は上田市芳田在住のフリーのナレーター・アナウンサー。県内テレビ局やケーブルテレビ局の番組でアナウンス業務を経て、イベント司会などを25年以上務めると同時に、20年ほど前に習得した英会話を生かした仕事もこなす。また、カメラマンのご主人と映像制作などにも取り組む傍ら、10年前から定期的に朗読会を企画出演、かつ音読講座や朗読講座など「声の教室」を開講。講師を始めて4年目の現在は、長野・上田・佐久で6つの講座を担当し、80人の受講生を抱える。

多方面で活躍しながら、一般社団法人日本朗読検定協会の認定プロフェッサーや小学校英語指導者などの資格を取得。2015年から8年にわたる上田図書館倶楽部主催の「名作を味わう大人の朗読会」への出演は、第14回青空文庫朗読コンテスト銀賞受賞につながった。

多岐にわたるキャリアをこなす活力はどこから？　4月中旬、

冒頭の講座を見学した。

＊外郎売：享保3年に初演された歌舞伎十八番の中の演目。発音・滑舌・演技の練習に使われる。

Q　声のお仕事を始めようと思ったきっかけは何ですか。

A　子どもの頃の家庭環境が「漫画ダメ、本をたくさん読みなさい」だったのです。ですので、本はたくさん読みました。次第に声を出して読むようになり、それが面白くて、登場人物の声を演じ分ける朗読に興味を持ち始めたのです。それが仕事につながりました。今は親に感謝しています。

小学生中学生の頃に読んだ本は私の宝物で、特に山本有三の『路傍の石』が好きで何度も読み返しました。

Q　キャリアも多彩ですね。エピソードなどもお聞かせください。

A　大学卒業後、東京で会社勤めをしながら声優養成所で学び、声の仕事を始めました。県内のテレビ番組のレポーターや司会者、ナレーターなどを務めました。

また、長野オリンピックを機に英語を習得しようと、アメリカカリフォルニア州の語学学校へ半年間留学しました。留学したからといってペラペラになれるわけでなく、帰国後も15年間英会話学校に通いました。当時は、長野県内にバイリンガルの司会者やナレーターがほぼいなかったので、にわか仕込みでも英語を使う仕事を徐々に頂けるようになったことが英語習得のモチベーションになりました。

印象に残っている仕事は、県内のテレビ局で制作した鬼無里村に伝わる伝説「鬼女紅葉」の生涯をドラマ風に紹介する番組で、主役の鬼女紅葉を演じたことです。学生時代は演劇部だったので演じることに抵抗なく、二つ返事でお受けしました。28年前のことですが、役になりきって撮影に臨んだことを今も鮮明に憶えています。

「声の教室」は、父が誤嚥性肺炎で亡くなったのがきっかけです。加齢とともに話しづらくなったりむせたりすることが多くなりますよね。喉の健康が大事だと痛感し、声を出す仕事をしている自分がお役に立てるのではないかと思い、始めました。始めましたら申し込みが多くて……定員オーバーでお断りしている状況です。皆さん、健康に関心がありますね。

初め、講師の仕事に興味はなかっ

たのですが、やり出したら「自分に向いているかも」と思えるようになり、今は楽しく携わっています。自分の可能性がひとつ増えたように思います。

Q　和気あいあいとした雰囲気で、皆さん楽しそうです。

A　自分だけが話すのではなく、できるだけ皆さんに話してもらうようにしています。例えば、「人の機能のうち最も衰えて困るものは何だと思いますか」の質問に、いろいろな意見が出ましたね。足腰や脳の働き、食べることなどなど。いずれも正答なのですが、最も困るのは嚥下機能だと言われています。皆さんに考えてもらい発表してもらうことで全体の雰囲気が盛り上がり、私も多様な意見を聞いて参考になります。

音読やカラオケは喉を動かす筋肉を鍛えますので、嚥下機能老化防止にこの講座が役立ったら嬉しいです。発声練習も皆さんが興味を持ちそうな詩歌や物語を選び、集中してもらえるようにしています。

Q　3月に上田情報ライブラリーで開かれた朗読会に参加しましたが、物語（江戸川乱歩作の「人でなしの恋」）に惹き込まれました。登場人物になりきった声の抑揚や強弱が印象的でした。

A　自分の声は変えられませんが、声の表情は作ることができます。平面的な文章を立体的に表現して、聴く人に届ける。聴く人は演劇を観ているようにイメージできます。日常を忘れ、物語の世界に溶け込んでいただ

上田情報ライブラリーでの朗読会

「音読で喉トレ＆脳トレ」講座

けたらと願っています。

表現法を豊かにするために神田伯山さんの講談を聞いたり落語を聞いたりしています。

Q　「平面的な文章を立体的に表現する」とても印象深い言葉です。朗読する本はどのように選びますか。

A　重点を置いているのは、日本語の美しさやリズム感があって、声に出して読みたい作品かどうか、伝えたいメッセージがはっきりしているかどうかなどです。何よりも、朗読は聴き手がいて成立するものなので、客層や季節に合う作品かどうかも考慮に入れています。

Q　これだけのキャリアをこなすには健康が大事だと思いますが、日ごろのケアはどのようにしていますか。

A　睡眠はたっぷりとるようにしています。特に決まった運動はしていませんが、滑舌トレーニング（口の動き・舌の動き）と発声練習は毎日欠かしません。お腹の底から声を出すのでおのずと腹筋が鍛えられているのかもしれません。フリーランスなのでいつ仕事がきても対応できるようにしています。

Q　抱負をお聞かせください。

A　「声の仕事」の中で一番好きなナレーションの仕事により力を入れたいと思っています。ナレーターとしてのキャリアアップを目指して、今春まで2年間東京のナレータースクールで基礎から学び直しました。もっともっと視野を拡げたい。

◇　◇　◇　◇　◇

講座が終わっても受講生がひとりふたりと駒村さんに近寄り、言葉を交わす。みな去りがたい様子。常に人と関わりながらキャリアを積み上げてきた駒村さんには、すらっとした体型に洗練された優雅さが漂う。その上品な雰囲気が人を惹きつけるのだろう。

「自分の好きなことだから頑張れる」と控えめに話す駒村さんだが、国内のみならず海外にも躍働の範囲を拡げていくパワーを感じた。

令和5年4月13日取材

伊藤文子

信濃を旅した文人たち

林聖子をめぐる人々（その一）

新宿の花園神社近くにあるバー「風紋」を知ったのは20年近く前、カルチャーセンターでの太宰治の講座だった。「風紋」は作家や出版人たちが夜毎に集う伝説の文壇バーで、女主人の名は林聖子。太宰の小説『メリイクリスマス』のモデルになった人物だ。

２０２２年２月、林聖子逝去の報が流れた。享年93。１９６１年の開店から２０１８年まで、実に57年もの間「風紋」と共に生きた人生だった。

聖子の父は、上田市出身の画家林倭衛（しずえ）（１８９５―１９４５）である。生家は小県郡上田町（現・上田市常磐城）にあったが、倭衛12歳の時、両親は事業に失敗して上京。翌年、上田町立尋常高等小学校（現・上田市立清明小学校）を卒業した倭衛も上京、家計を助けようと書店や印刷所で働き始めた。

小さい頃から絵が好きだった倭衛は、翌年、日本水彩画研究所の夜間部に入り、画家として生きていく決意を固める。生活のため道路人夫として働きながら＊サンジカリズム研究会に加わり、大杉栄らアナーキストとの交流が始まったのもこの頃である。

＊サンジカリズムとは労働組合を基礎とした社会活動のこと。

21歳の時、倭衛は第三回二科展に出品して初入選する。翌年の二科展では「小笠原風景」などで樗牛（ちょぎゅう）賞を受賞。二科会創立会員の有島生馬から「林倭衛氏は二科会にとって宝の一つである」と評されるなど、若くして注目されていく。

倭衛の代表作とされる「出獄の日のO氏」は、大杉栄をモデルに描かれた。くすんだ赤茶色を背景に、鋭い視線とキリッと結んだ口許。一度見たら忘れられない絵だ。ところが、この絵は第六回二科展で警視庁から撤去命令が出されてしまう。この件は、国家が思想統制で美術展に介入した最初の事件として物議を醸した。

１９２１年、26歳の倭衛は画家仲間たちと渡欧、パリを拠点にして創作活動を始めた。2年後、大杉栄がアナーキスト国際会議のためにパリに現れる。再会した二人は数か月を共に過ごすが、大杉は日本に強制退去させられた上、関東大震災の混乱の中で殺害されてしまった。

この頃、倭衛はモデルのイボンヌと出会って同棲する。イボンヌは失意の倭衛を支え、彼女をモデルに「フランスの女」など、何点もの作品が描かれた。南仏プロヴァンスではセザンヌのアトリエを借り、意欲的に制作に取り組んでいる。

１９２６年、深酒により体調を崩しがちだった倭衛は、5年にわたる滞欧を切り上げて帰国する。翌年の第五回春陽展では、倭衛の作品が一室を占めて注目を浴びた。この年、秋田富子と知り合う。岡山から上京した富子は、女学校に通いながら絵を学んでいて、フランス帰りの倭衛と出会った。倭衛33歳、富子19歳の時に結婚。ところが、１９２８年1月、倭衛は身重の富子を置いて再度渡仏、直後の3月に生まれたのが聖子である。

倭衛はパリで再びイボンヌと暮らし始めたが、一年数か月後、一人で帰国する。その年、イボンヌは息子ジョルジョを出産した。聖子が一つ違いの異母弟の存在を知るのは、ずっと後のことである。

さて、親子三人で暮らし始めた林家だが、平穏な日々は長くは続かなかった。富子が肺結核にかかり、倭衛は芸者だった高橋操と恋愛、別居状態となる。富子が富士見のサナトリウムに入ったため、小学生になった聖子は祖父母と暮らしたり、父と暮らしたりを繰り返す。倭衛と操との間には次女葉子と長男木平が生まれている。そんな破天荒な父だったが、それでも聖子は父が好きだったという。聖子を溺愛し、展覧会に連れて行ったり、飲み屋にまで連れて歩いた

りした。

やがて、サナトリウムを出た富子が高円寺のアパートで暮らし始め、女学校に入った聖子は週末ごとに母を訪れるようになる。体調のよい時、富子は生活のために新宿のカフェ「タイガー」で働いていた。気品があり清潔な雰囲気の富子のもとには、室生犀星や萩原朔太郎、太宰治などが足繁く通ってきた。太宰はたびたびアパートにも遊びに行き、聖子と顔を合わせることもあった。

一方、創作を続けていた倭衛の方は、長年の深酒によって肝臓を壊していた。戦争が深刻化する中、体調は次第に悪化、１９４５年１月26日に急死する。49歳だった。その画業に光があたるのは、戦後しばらく経ってからのことである。

上田市立美術館には「フランスの女」など林倭衛の作品が収蔵されている

父の葬儀の後、聖子は富子のもとに移り、その後、ふたりは岡山に疎開した。終戦を迎え、17歳になった聖子は富子と上京、三鷹市下連雀に落ち着く。翌年、故郷の津軽に疎開していた太宰も三鷹の旧居に戻って来ていた。その年の11月、聖子は三鷹駅前の書店で太宰とばったり出会った。

半月ほどたった頃、太宰は聖子の家を訪れ、「これは僕からのクリスマスプレゼント」と言って『中央公論』新年号を差し出した。そこには、再会の様子をもとに描いた小説『メリイクリスマス』が掲載されていた。主人公の少女の名前は「シヅエ子」。父親の倭衛から名付けたのだろう。母親のことは「いまだしぬけに逢っても、私が恐怖困惑をせずにすむ極めて稀な、いやいや、唯一、と言ってもいいくらいのひとであった」と書いている。実際、太宰にとって、富子は男女間のややこしい感情を抜きにして付き合える女性だった。たびたび富子の元を訪れていて、小説『水仙』では富子から来た手紙の一節を用い、絶筆となった『グッド・バイ』の中にも登場させている。

1947年、19歳になった聖子は太宰の紹介で新潮社に入社する。その後、さまざまな出会いを重ねながら「風紋」の女主人となっていくのだが、その道程については次号に回したい。

海野　郁

参考文献

『聖子ー新宿の文壇 BAR「風紋」の女主人』森まゆみ　亜紀書房 2021

『風紋五十年』林聖子　パブリック・ブレイン 2012

『林倭衛』小崎軍司　三彩社 1971

『林倭衛画集』東御市梅野記念絵画館 2015

『太宰治全集』第 5・9 巻　筑摩書房 1976

『回想　太宰治』野原一夫　新潮社 1980

『評伝　太宰治　下巻』相馬正一　津軽書房 1995

『回想の太宰治』津島美知子　講談社 2008

ぶらり散策

矢出沢川遊歩道（やでさわかわ）

上田城の北側を流れる矢出沢川。その周辺はかつて城下町だった古い街並がわずかに残り、どこか懐かしさを感じさせる景色が広がっています。川沿いにはウォーキングトレイルと名付けられた小道が整備され、市民の通勤や散歩などの他、まち歩きを楽しむ観光客が訪れるスポットとなっています。今回紹介するのは、旧北国街道と国道 18 号線の間を並行して走る遊歩道です。矢出沢川の右岸に整備された歩行者専

用道路で、上田城から北に 500 mほどのところにあります。時々通勤に利用している知り合いから、心地よいコースがあると耳にしていて気になっていた場所です。二の丸通り（上田消防署から上田郵便局に向かう通り）に架かる「西八幡橋」からスタートし、「浮世橋」と「上須波橋」を通り過ぎて「下須波橋」まで片道 20 分くらいの距離を歩いてみました。

4 月初旬、桜の季節に訪れたときは、道沿いに水仙やチューリップが咲いて、あちこちに桜のトンネルができていました。犬を連れて歩く人や花見客で賑わっていました。

6 月中旬、梅雨の季節にふたたび訪れてみました。とても静かで木々や草花が豊かに生い茂り、紫陽花が色づき始めていました。川のせせらぎや鳥のさえずりも聞くことができました。

城下町の街歩きや上田城跡公園散策の折に、矢出沢川遊歩道まで足を延ばしてみてはいかがでしょうか。四季折々の景色が楽しめ、リフレッシュできることと思います。

6 月 13 日訪問　望月聡子

矢出沢川遊歩道マップ

参考資料：上田市役所公式ホームページ
https://www.city.ueda.nagano.jp/soshiki/tosikei/6118.html

戸隠神社の春の神事へ
戸隠講で宿泊した翌朝の光景。雨あがりの山々とアヤメが爽やかな緑に映える。春の神事は、農民にとって五穀豊穣、農作業の無事安全を願う大切なお祓い行事。今年も地域の人々と訪れて神前にお酒とお米を奉納、気を引き締めてお祓いを受けた。

気ままなひとり旅

旧弘前市立図書館

弘前城天守

時々、一人旅をしている。きっかけは、20年以上も前になるが、長男と次男が県外の大学に進学した際、アパートに泊めてもらい近くを見て回ったこと。若いころから歴史や城が好きなので、訪れた先で少し足を延ばして観光、その後「日本１００名城」を知り行ってみようと思った。お城を撮るためにカメラも買い替えた。

団体旅行は日程など合わないことが多いので、自分の都合に合わせて1泊から2泊で計画している。退職後は、東日本に関しては「大人の休日倶楽部パス」の日程に合わせるようにし、西日本は都合の良い時に行くようにしている。行き先が決まったらインターネットで経路をたどり、主に鉄道を利用するが、時には空の便も。

経路を決めたら乗り換え案内サイトで乗り継ぎを調べ、下車駅周辺の名所などは市町村のホームページの観光案内を利用。市内バスの案内などが詳しく載っていて、事前準備に役立っている。宿泊先はできるだけ駅近くのホテルを探して予約。時間に余裕をもって計画を立てることを心がけている。

一人旅は、興味のある場所に自由に時間をかけることができるので気に入っている。時間のない時はランチを抜くこともあるが、多少の空腹や疲れは苦にならない。すべて自身の判断なので、風景や史跡などが鮮明に記憶に残る。

昨年11月末、47年ぶりに青森へ。当時も一人旅だった。上野発の夜行列車で行き、翌朝野辺地へ着いたと記憶している。今回は青森まで新幹線、新青森駅から奥羽本線

八戸、根城

三内丸山遺跡

に乗り弘前駅で下車、市内循環バスで弘前城へ。あいにくの雨だったが、東日本唯一の江戸時代からの現存天守である津軽氏の居城、弘前城をゆっくり見学できた。その後、広い城跡公園や周辺の街並みなどを1時間ほど散策。続いて弘前城に隣接する観光会館で山車等の展示や旧弘前市立図書館を見学した。明治39年に建てられ、昭和6年まで市立図書館として利用されたという旧図書館は洋風の素敵な建物だった。

新青森駅前のホテルで一泊し、翌日は、タクシーで世界文化遺産である縄文時代の遺跡、三内丸山遺跡を見学。建物跡や住居跡、六本柱建造物跡など、太古の集落跡に感激した。以前から行きたかった場所なので大満足。次は東北新幹線で八戸へ。安土桃山時代の城、根城と博物館を見学。市内バスで八戸駅へ戻り新幹線で帰着。思い出に残る楽しい旅となった。

昨年6月には社内旅行以来51年ぶりに会津若松城（鶴ヶ城）へ出かけた。ボランティアガイドさんの案内で公園内を回った後、城内を見学した。会津若松駅で軽いランチの後、会津鉄道に乗り湯野上温泉駅で下車、タクシーで大内宿へ。同年輩の運転手さんのわかりやすい説明を聞きながら一回りした後、同じタクシーで湯野上温泉駅へ。駅に隣接した足湯に入ってみると暖かさに足が軽くなったようだった。また会津鉄道に乗り会津若松駅へ。駅近くのホテルで一泊し、翌日は戊辰戦争で二本松少年隊の悲話を残して落城した二本松城（霞ケ城）へ。城跡公園を見学の後、新幹線で新白河駅へ。白河

大内宿

会津若松城

小峰城では天守と見事な石垣を見学し、新白河駅から新幹線で帰着。幕末の悲劇の舞台となった会津地方を訪れることができ感慨深い旅となった。利用したタクシーの運転手さんに「こんな暑い時期に来ないで雪の季節の方が良い」と薦められたので「長野なので雪は十分。間に合っています」と笑いながら答えた。

こうして「日本１００名城」も40城は見ることができた。年齢などを考えると完全制覇は無理と思うが、少しでも近づきたいと願っている。

中村恵子

白河小峰城

二本松城

ウクライナの子どもたちの日記

ウクライナの少女ズラータ・イヴァシコワは２００５年生まれの16歳。ドニプロという街で母親とマルチーズと暮らす高校生だった。独力で日本語を習得、日本の漫画やアニメに熱中し日本の作家にも興味を抱いた。ネットで購入した太宰治の『人間失格』は初版本で１万５千円もしたが、自分の小遣いで買った一生の宝物だ。彼女の夢は、いつか日本で漫画家になることだった。

２０２２年2月24日、戦争が彼女の生活を一変させた。爆撃音や空襲を知らせるサイレンが頻繁に鳴り響く。夢の一つも実現できずにこのまま命を落としてしまうのか。ズラータは不安でいっぱいだった。すると、戦争が始まって以来、なにやら調べたり考え込んだりしていた母が突然言った。

「ズラータ、あなたは日本に行くのよ！」

ポーランドのワルシャワから日本に行ける飛行機が見つかったのだという。自分はこの歳で日本に行っても言葉もわからないし、仕事をするのも無理だろう。せめてズラータだけでも日本に避難して夢を叶えてほしいと。

最初は混乱していたズラータだが、躊躇している余地はなかった。3月17日早朝、母が必死になって工面した航空運賃16万円を持ち、ワルシャワまで送るという母と家を出た。ドニプロ駅は避難する人たちでいっぱいで、列車はいつ出発するかわからない。半日待ってようやく出発した列車は、24時間以上かけてドロホブィチ駅に到着、バスに乗り換えてポーランドとの国境の街シェヒニに向かった。

ここで思いがけないことが起こった！　取材に訪れていた日本人のテレビクルーと遭遇したのだ。母に背中を押され、ズラータは生まれて初めて日本人に話しかけた。日本で漫画家になりたいこと、そのために避難して日本行きの飛行機に乗りたいことなど、夢中で話した。日本語を話す少女に驚きな

がら、彼らは誠実に対応、連絡を取り合うことを約束した。私の日本語が通じた！　ズラータの胸は高鳴り、一筋の光が差し込んできたように思えた。

３月19日、ようやくワルシャワに到着。後は日本大使館に行き、ビザの申請をして航空券を買うだけだ。ところがなんと彼女はコロナに感染、長期の隔離生活を余儀なくされてしまった。その日々を支えたのは、あの取材スタッフやワルシャワに住む日本人だった。

４月９日、ズラータは夢にまで見た日本の土を踏んだ。満開の桜と、日本人の身元引受人が出迎えてくれた。以前、本を買ったときにネット上でやりとりした人で、母がZoomで連絡を取り合って依頼していた。

一か月後、彼女は念願だった一人暮らしを始める。日本語学校に通いながら、部活として美術のクラスに入り、ギターも始めた。美術大学に進学することも考えている。

ただ、ドニプロにいる母のことだけが心配だ。その母は「気をつけているから大丈夫！」と、相変わらず動じない。母の英断によって実現した日本への避難。その母に、そして手を差し伸べてくれた人々に感謝しながら、彼女は夢に向かって歩いている。

２０２２年10月、『ウクライナから来た少女　ズラータ、16歳の日記』が刊行された。日記には彼女の絵が添えられていて、そのクオリティの高さは驚くほどだ。一歩前進した少女に、心からのエールを送りたい。

２０２３年２月28日と３月１日付朝日新聞に、日記を綴るウクライナの子どもが紹介された。その一人、ハルキウ出身のイエバ・スカリエツカは、アイルランドに逃れるまでの日々を日記に書き記した。

２月24日早朝、突然の爆発音に目覚めたイエバは、咄嗟に日記帳を手に地下室に逃れた。暖房もない地下室で、恐怖に震え息を殺しながら、今起きていることを綴り続けた。一週間後、イエバは祖母と共にハルキウを脱出、３月12日にアイルランドの首都ダブリンにたどり着いた。ハルキウの自宅アパートは破壊されてしまったと聞いた。ただ、祖母が自分たちを「難民」と呼ぶことだけはどうしても許せない。いつかきっと自分の家を取り戻したいと思う。

イエバはダブリンで13歳の誕生日を迎えた。彼女の日記『あなたは戦争が何かを知らない』は、現在、約20カ国で出版されている。その本を現代の『アンネの日記』と呼ぶ人たちがいる。初めて『アンネの日記』を読んだイエバは、その中に自分との共通点を見た。アンネも「なんとかなる」という希望をいつも持っていたんだと。

ロシアのウクライナ侵攻から1年以上たつが、いまだに終わりが見えてこない。アンネは「書いてさえいれば、なにもかも忘れることができる」と綴っていた。ウクライナの子どもたちにとっても、書くことが救いになっているのだろうか。

何もできないでいる大人の一人として、せめて一日も早い戦争の終結を願い続けたい。（はな）

一輪の花

毎日一輪の花を生けようという本※を目にして「これだ！」と思いました。ちょうど、庭に咲く季節ごとの花を暮らしの中に活かす方法はないものかと思っていたところでした。

花や葉を取り揃えて形よく生けるのはなかなか大変で、とても毎日というわけにはいきません。でも一輪を摘んでくればいいのなら続けられるかもしれない、一輪だけなら花器は湯飲みでも徳利でも百均のコップでもいい。ということで以来毎日一輪を生け、写真に収めるようになりました。ためしに友人に送ったところ思いのほか喜ばれたので、気をよくして毎朝花の写真のLine便も開始。

今まで気づかなかった小さな花や雑草に目がいくようになり、棚の奥の古い食器は花器として日の目を見ました。一輪からうまれる朝の一瞬のゆとりを楽しんでいます。　幸

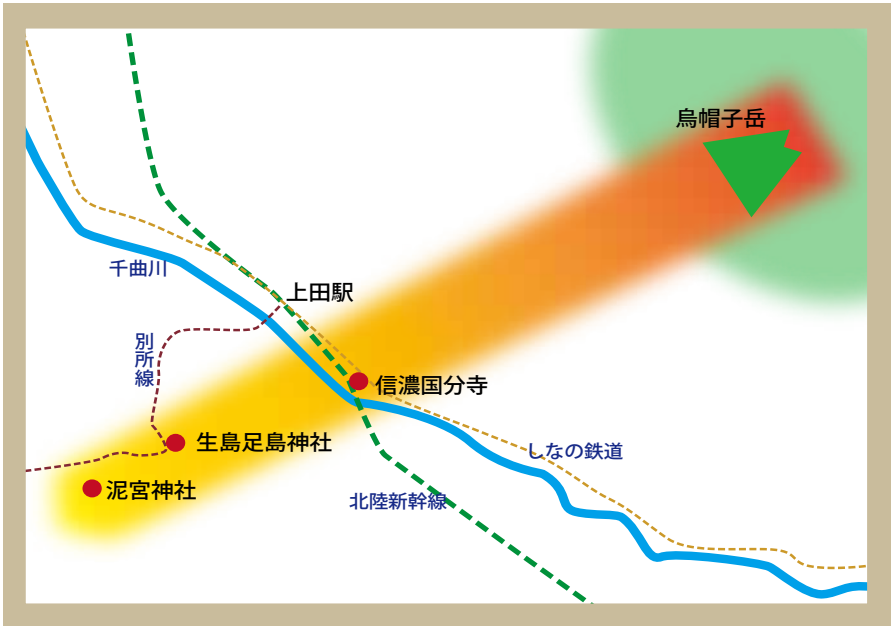
※『毎日、一輪。はじめて花・葉・枝を生ける人のための手引帖。』小野木彩香／著

暮らしを語るレイラインスポット

泥宮神社から望む烏帽子岳山頂から昇る夏至の朝日

２０２０年６月に日本遺産に認定された「レイラインがつなぐ『太陽と大地の聖地』～龍と生きるまち信州上田・塩田平～」は、３年経った現在、上田の主要な観光地になっている。レイラインは、烏帽子岳（標高２０６６ｍ）山頂から昇った夏至の朝日が、国分にある信濃国分寺と下之郷にある生島足島神社を貫いて、上本郷にある泥宮神社に届くというもの。まさに太陽の光が山頂から一直線に注ぎ、神秘的な趣をなす。

泥宮神社の御神体は「泥」、生島足島神社の御神体は「大地」、信濃国分寺は「大日如来・太陽」を安置し、『太陽と大地の聖地』の神髄をあらわす。「環境学や風水の観点からも理想



的」と聖地観光研究家の内田一成さんは強調する。（『レイラインハンター：日本の地霊を探訪する』内田一成著より）

また、塩田平は降水量の少ない地域で、稲作に欠かせない用水を求め、500年前から雨乞い祭りが行われ、伝統行事になっている。

「日本遺産は、降水量の少ない風土で、身近な山々に宿る龍神と密接に関わってきた塩田平の人々の暮らしそのもの」と泥宮神社の近くに住む矢幡正夫さん（78歳）は話す。矢幡さんは上本郷の農家で、農政に関する職場に勤務した。地元の農業や暮らしを見てきた矢幡さんにレイラインの意義、地元民との関係などを聞いた。

Q　レイラインは偶然わかったのですか。

A　いえいえ、泥宮神社がそのように建てられたと考えられるのです。歴史は古く、創建年代は不明ですが、当時の人々が夏至の朝日を望めるように、神殿と鳥居の方向を決めたのでしょう。また冬至の日は、生島足島神社の西鳥居から泥宮神社の西に夕陽が沈むのを眺めることができます。

Q　どうして夏至の朝日に合わせたのでしょうか。

A　昔は田植えの時期が

夏至の頃だったと思われます。豊作を願いながら朝日を拝んだのでしょう。当時は太陽の昇る位置で、季節や月日の移り変わりを知ったのだと思います。

泥宮神社がある上本郷は塩田平の中心に位置し、弥生時代から稲作の先進地であったことが、昭和48・49年頃に行われた発掘調査で明らかになっています。

泥宮神社昇り旗

Q　下之郷の生島足島神社もレイラインが通りますね。

A　生島足島神社は武田氏や歴代上田藩主の保護を受け建立されました。下之郷における歴史は古く、特に神前で取り交わされたと言われる武田信玄武将の起請文は、神社の貴重資料として国の重要文化財に指定され、全国的にも有名です。本殿正面の鳥居は西側にあり、泥宮神社の方を向いています。7年に一度行われる御柱祭では、上本郷が一の柱の先頭を引くことから、泥宮神社と生島足島神社は深い関係があると考えられます。

Q　信濃国分寺とレイラインの関係は？

A　信濃国分寺は直線から少し外れるのですが、レイラインは雨乞い祭りも含みますので、雨の神様、龍がくねくねと信濃国分寺も通るという広義なストーリーに仕上げられたのだと思います。

矢幡さんは「レイラインは温故知新」だと言う。「3年前に突然注目されるようになりましたが、レイラインは先人たちの知恵が詰まったもの。その経緯に思いを馳せ

てほしい」「機械や農薬がなかった時代、田植えや除草、稲刈りはすべて手作業でした。刈り取った稲はすべて天日干し。ため池は村民総出で造られたと言われています。どうすればうまくできるか工夫を重ねながらの大事業です。まさに太陽と大地と共に歩んだ暮らしだったのでしょう」と当時の稲作を偲ぶ。

写真愛好家でもある矢幡さんは長年塩田平の風景をカメラに収めている。一コマ一コマの写真の中には、その風景を築き上げてきた歴史や人々の暮らしを丁寧に盛り込む。めったに見られない塩田ならではの自然現象も、天候と時刻を見極めその瞬間を狙う。日本遺産レイラインに関わる地域の存続や発展を願いながら、きょうもシャッターを切る。

3月15日取材　伊藤文子

矢幡正夫さん

桜に囲まれた泥宮神社

あとがき

環は創刊から12年半、第50号を迎えた。コロナ下でも滞りなく発行できたのは、読者の皆さんの暖かいご支援と取材や寄稿を快諾くださった方々のおかげである。

環は2011年１月の創刊時に、どのような内容・体裁のジャーナルにしていくかスタッフで熱い話し合いを重ねた。結果、冒頭に下記の一文を掲げた。

発行にあたって

上田市は周囲を山々に囲まれ、中央を千曲川が流れる東信州の中心都市です。甲武信ヶ岳に源を発した千曲川は、新潟県に入って信濃川に注ぎ、日本一の大河となります。川はかつて、交通の要衝でした。川の流れとともに文化も発展してきました。

この電子ジャーナル「環」＜千曲川地域の人と文化＞は、千曲川地域を主なフィールドにして、さまざまな文化を紹介していきます。

◇ユニークな図書館や美術館などを訪問し、そこでの先駆的な取り組みに焦点を当てます。陰には必ず創造力溢れる仕掛け人がいます。

◇個性的なセカンドライフを楽しんでいる男性女性に登場していただきます。

◇各界で活躍している方々からの寄稿もあります。ここでしか読むことのできない、それぞれの思いが込められた貴重なものです。

◇今まで知られていなかった埋もれた文化や活動を発掘し、それらの発表の場にしたいとも考えています。

文化を通して、人と人、人と地域をリングのように結び、文化とコミュニケーションの環を広げていきたい、そんな願いをこの「環」に込めました。皆様からのご意見ご感想をお待ちしております。

ＮＰＯ法人　上田図書館倶楽部

上記の趣旨に基づき、県内各地ときには県外にも足を延ばして取材を重ねた。地域で活躍している人たちに会い、ユニークな図書館

や美術館を訪ね、また信濃にゆかりのある文人たちを取り上げ、その生涯をたどった。多彩な分野で活躍している方々から貴重な寄稿もいただいた。

取材で得た情報やその人その場ならではの印象・雰囲気などは環に蓄積されると同時にスタッフの宝物になっている。

（ふみ）

創刊号表紙

環（KAN）　千曲川地域の人と文化を紡ぐ
第 50 号　青蚊帳　2023 年 7 月発行
NPO 法人上田図書館倶楽部
https://ueda.zuku.jp/
電話 /FAX　0268-25-3115　info@zuku.jp
（上田情報ライブラリー委託事業）

表紙及び文中の写真・絵は無断使用を禁じます

環スタッフ：
伊藤文子　海野 郁　西入幸代
宮下明彦　望月聡子　矢幡正夫

ＮＰＯ法人上田図書館倶楽部は、図書館との協働による学習活動や情報サービス活動、文化活動などを行っています。また図書館関連業務を上田市から受託して、市民参加による幅広い図書館サービスを行い、地域文化の発展に寄与することを目的としています。電子ジャーナル「環」も受託事業の一つとして上田図書館倶楽部が発行しており、千曲川地域の文化を通して人と人、人と地域をリングのように結び、文化とコミュニケーションの環を広げていくことを理念に掲げています。